

# 町長

## ひとりごと

(62)

### 斉藤 譲

久方振りに犬を引き、暮れ泥む栗山川の堤にたつた。見渡せば辺りは一面、冬枯れの

中である。いま西の山際にかかる雲間から、鈍い冬の陽射が射しこみ、向かいの山裾に寄りそ

傍示戸や富下の小さな家並を、夕映に染めている。身近に目

を凝らせば、両岸を埋める葎の枯葉や、堤の枯草の間には、

青草が芽を出し、早くもイヌクグリが、うす青い可憐な花を、疎らに咲かせていた。

この春の兆しが、暖冬を実感させ、本格的な春の到来の間近さを予感させる。

二月半の、静かで、平和な農村の夕暮れ時である。

▼最近私は、まわりの人や、会う人達から「顔色が悪い、疲れているようだ」などと心配やら注意をいただき、少々気に懸っていた。

たしかにこのところ、公務や雑事に追われ、一日としてゆっくりと休める日もなかった。いささか疲労ととも

然の中に身をあずけていると、いつしか心が鏡のように深く

澄み、快感が腹底から湧いてきた。これこそが、農村での

み味わうことのできる豊さの実感であって、都会の雑踏の中

では決してこの豊さを味わうことはできない。

▼ところが、暫らく漫ろ歩くうちに、この素晴らしい気分を一変させる、実に嘆かわしい

場面に出交した。散乱する空缶や、無残なコンクリート破片のかたまりが、

行く手に現れたのである。これを見た途端、私の穏やかだ

つた心は急に波立ち、激しい憤りが胸奥から突き上げてき

た。県当局が折角、地域の人々に散歩やジョギングを楽し

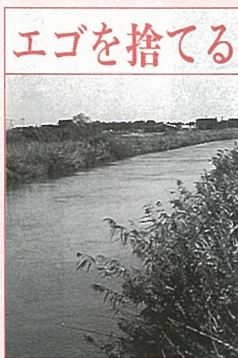
んでもらおうと舗装をしてくれたこの道脇に、果たして誰

が、何時、どんな気持ちで、こんな物を捨てていったので

あろうか。

愚かな人間にはわかるまいが、きつとその時、辺りの草木は、心無いその仕草に、鋭い軽蔑の視線を送っていたに違いない。こんな人間は、社会人失格であり、子供の教育は勿論、自然を語る資格などもない。あるのはただ、己のエゴ(身勝手)と語り合うだけの、汚れた、淋しい心だけだ。

▼現代のような大量消費社会は、ごみの大量生産社会でも



エゴを捨てる

ある。この単純な因果を忘れ、やみくもに物の豊さを追い求めてきたわが国は、いまごみ

処理問題という大きな付けを負い、苦悩している。国家や

自治体、それに家庭でもある。地域エゴ丸出しのごみ戦争、

不法投棄による環境破壊が、それを象徴している。実は、

わが町としてその例外ではない。各地区のごみステーションは

いま、心無い人達によってごみの山と化し、人目のつかない

場所が大量のごみや廃棄物で埋まったり、道路という道路のまわりには空缶が捨てられるなど、まさに惨たんたる姿である。社会的モラルは、

今や全く地に落ちてしまった感じがする。誠に悲しく、残念でならない。

先日、ある会議で、こんな意見が飛び出した。

「町長、いま各地のゴミステーションの荒廃はひど

すぎる。町もシンガポールのように条例で罰則を定めるの

か。こうなつては、これ以外に手はないのではな

いか。」

本当にそうしたくなるほど、深刻な事態であり、人間の本性は善であると説く、孟子の

性善説が信じられなくなる。▼「旅の恥はかき捨て」という

ことばもあるが、自分の足元でさえこんな状態であるから、旅先のことを思うと、一

層心が寒くなってくる。いまここに、松原泰道氏の

「旅とは何か」という随筆の一部を紹介し、お互に考え直

してみたい。「昔は仏道に限らず、どの道の人たちも修行のために旅

に出たもので、各地をめぐり歩いては、かくれている立派な人、その道に優れている人を探りあてて、めぐり会っては学んでいたものである。現代人が旅に出る態度とはまるきり違うものであったから、旅のマナーもよかつた。旅そのものが修行であつたからである。昔の人は旅の苦しさを味わううちに、次第次第に身びいき、身勝手の、自分中心の考えを捨てていくことができた。旅で捨てるべきはこのエゴなので、エゴを捨てることによって、プラスになる多くのものを学んで身につけて帰ってきたのである。ところが、現代の旅はあまりに快適すぎて苦勞がないために、捨てるべきエゴはいよいよたくましくなり、捨つて帰るべきごみをとく構わず捨ててきてしまつたので、学んで帰る土産はまったく無くなつてしまつた。」

▼人生も旅であり、旅もまた人生である。私もわが心に棲むエゴを、迫りくる夕闇の中に、そつと捨てていこうと思つた。